

## 各地の取り組み その2 鹿児島県肝付町

# めざすべき子育て支援を探りながら

—NP・BPから学んだもの—

高山子育て支援センター ちゃいるどはうす 指導員 日高 由美

### 頭をよぎる一言文集のことは

14年前、町の委託事業である“子育て支援センター(ちゃいるどはうす)指導員”という仕事を頂きました。その頃、子育て仲間としてのメッセージにでもなればとの願いで「今思う事」と題し、お母さん達の一言文集作りを企画しました。

「生後5か月頃までは、子どもはかわいけれど産まなきゃよかったと思う日がずっと続いていた。ほとんど家から出ず、両親や夫以外の人とは誰とも話さないという状態だった。外見はそう見えなかったかもしれないが、かなりうつ状態だったと思う。毎日イライラしていた。～中略～友だちが誘ってくれたのは“ちゃいるどはうす”。自分が変わったのはここのおかげ。誘ってくれた友だちに大感謝！ここに来なければ大げさかもしれないけど虐待していたかも…。ここには新米ママ、ベテランママがいっぱい。会話も楽しい。友だちも増えた。子育ての選択が1本から5本にも10本にもなって余裕が出てきた。子育てママは外にいっぱい出ているんな人と話すべきと私は思う」これは約1年半、当センターを利用してくださったお母さんが書かれたものです。

ここは、鹿児島県大隅半島の中央寄りにある肝付町という人口1万6千人程の小さな町です。少子高齢化の課題を抱えつつも、子育てしやすい町の一部分にでも成りえればと試行錯誤しながら取り組んできました。乳幼児(1歳半)健診での相談支援に出向いたり、平成21年からは乳児家庭全戸訪問事業にも携わらせて頂いています。月1回の子育て支援定例会を含めた行政との連携は、現在非常に大きな支えになっています。何をめざすべきなのか？現場でのさまざまな課題にぶつかった時、一言文集に綴られたお母さんの言葉が頭をよぎるものでした。



### 利用者数と支援活動の質は別

子育ては本来人の生活の日常的営みの中にあるもの。さまざまな社会変化の中でそれが難しくなっている今、具体的な支援策が必要です。子育て支援センターの活動内容を振り返ってみると、季節の行事を取り入れたイベントや親子遊び・工作などといった利用者を誘導する内容が目立ちます。当センターも例外ではありません。せつかく親子で集ってくださる場なのに、利用者にとって受身的内容にしていないかを、今一度考える必要があります。

利用者数と支援活動の質は別なものです。多数の中にも個を見る目が欠かせません。気になる様

子の親子を目にした時、なぜそうなっているのかバックグラウンドから親子の現状を理解していこうとする姿勢なしには、支援という役目には近づけないのではないかと。今、子育てのモデルを身近で見えて聞いて学べる場を失ったお母さん達は、悲鳴を上げることさえも許されず押しつぶされかけているように思えます。にもかかわらず「子育てはできて当たり前」というレッテルを社会と家族から貰い受け、なおかつ自分にも課して一人で踏ん張って「うまく育てられてないのは私だけなのでは？子育てを楽しく思えない私はダメな母親なのでは？」そんな思いを持っているお母さんが大変多いことに気づかされてきました。子育てスタートのただでさえ不安定な時に辛さを感じられた方は、その後も状況が継続傾向にあるようです。お母さんのゆとりはいつ得られるのでしょうか？もちろんそうでない子育て生活を送っている方もたくさんいらっしゃるのも事実です。当センターでは日常の子育てを開示できるよう、お母さん方の声が出せる聴き合える場をできるだけ提供していこうと、サロンタイムや座談会も取り入れてきました。

### 親を支援することで子どもを育てる

孤立を防ぐという言葉をよく耳にします。もっと真剣に考えなければならぬのだ、と今更ながら重く受け止めています。個に届く支援が必要なのだ。それはどういう事なのか？友だちとの交流が多いとお見受けしていたお母さんからNPプログラム参加を希望された時、「いつもママ友にダメなママと思われたいようものすごく気遣っています。でも子ども達は思うようにはいかず、そのストレスで帰宅後子ども達に当たってしまうのです。罵声を浴びせ手をあげることも…その後の罪悪感は何ものすごく、自分でどうしていいかわからなくなるんです」と話してくださいました。大変悲痛な言葉と涙は今でもしっかりと覚えています。参加に当たり、ため込んでいた思いをどこまで話せるか不安だったようです。実際にプログラムに参加して、完璧でなくていいと聞いてハッとしたことや、子どもに当たってしまうことで悩んでいる方々の話を聴いて、やっと安心して話せる場所と仲間に出会えたとしみじみと話してくださいました。自分の辛さと弱音を吐くことができ、それに共感してもらえたことでご自身の心が随分と軽くなられ、子どもへの関わり方も変化していかれたようです。

別なお母さんは参加後に「悩みを話すことは恥

## 当事者主体の支援の必要性

ずかしいと思っていました。友だちや幼稚園のお母さん達にも話せずにはいました。聴いてもらうことや話すことで気持ちが楽になるという事がわかりました。以前は私だけかなあと不安でしたがメンバーのAさんやBさんもこんなこと話していたなあと、その時のアドバイスやテキストを思い出すことで頑張れています」と。お母さん達は「自分の心が話せる場」ととても求めている、実はそれがなかなかできにくい状況にあるという事がわかります。また、自ら変わっていく姿にも驚かされます。回を重ねるごとに表情が和らぎ生き生きとされていきます。子どもへの関わり方が毎回のセッションの中で具体的に見えはじめ取り組みやすくなることで、家族に優しく関わられるようになったことを報告してください。メンバーで悩みを打ち明け考え合ったり話し合ったりという、指導型でなく参加型というプログラムの特徴とその力に驚かされてきました。とは言え、お一人おひとり生い立ちも価値観も異なる方々が共にする場です。安心して思いを話せるようファシリテーションすることは大変難しいと、何度実践しても痛感させられてきました。

また、お母さんの自己肯定感の低さ弱さもたくさんの方から感じてきました。プログラムを体験することで少しでもご自身の中に取り戻してほしいと願うのです。原田先生がおっしゃる「親を親として育て、親を支援することにより子どもを育てる」の言葉が、NPプログラムを更に貴重な支援策と位置づけさせています。行政からも理解を得ながら、これまで4回実施しました。まさに支援に必要な具体策の一つと実感しています。

### BPも定着させなければ

これらの体験が基になり、育児のスタート期に焦点化したBPプログラムの必要性も強く感じました。当センタースタッフを誘い“BPファシリテーター養成講座”に申込みました。現在5回目を実施しているところです。こちらもお母さん方の反響が大きいです。感想をご紹介します。

「育児について本当に手探り状態だったので、他のママ達と話せるチャンスと思い参加しました。4回がスムーズに楽しく進むように工夫されていて、赤ちゃんが泣いても気にせず過ごせ、たくさんママ達の日常の様子～こんな時どうしてる？～など細かく聞く事ができとても参考になりました」「毎回同じメンバーで日々思っていた疑問や不安、夫への不満（笑）など深く話し合うことができました。毎日何となく過ごしてきたのが今ではちょっとしたしぐさや表情、泣き方など注目するようになりました」「虐待のニュースを耳にした時、産む前はなんてことを！と思っていたけど、そのお母さんの気持ちが今は理解できるのです。参加させてもらい、たくさんママ達に気持ちを受け止めてもらえ救われました」と。

すぐにこのBPも支援活動として定着させなければと思いました。母子同室で行う事や、セッション計画が決まっている点などの取り組みやすさは、実施する上で大変助かっています。現在町内の対象となるお母さん方には必ず案内が届けられることを前提に計画しています。この点は“乳児家庭全戸訪問”の延長線上にありますので、非常に進めやすさを感じています。部屋の広さを考慮し、定員12組で取り組んでいます。ただ出生数からも定員に満たない状況にあるので、近隣市町からの参加も大歓迎し広域的に対応しています。その呼びかけとして鹿屋市にある小児科医院での掲示協力や、参加されたママから対象となる知人ママへ参加者感想を添えての声掛け、連携を取っている助産師さんからの声掛けも心強いところです。

どの方にもぜひ参加頂きたいと思うのですが、やはりそうならない場合もあります。どんな説明をするとこのお母さんに届くだろうかと、相手を見ながら言葉を探すことも多いものです。「友人も多いし家族も協力してくれて困ってないので参加しなくていいです」「首が座ってないし外出体験がなく不安なので今回は…」という返事をいただくこともあります。思わず「そうよねえ…そうかあ…」と次の言葉がうまく出てきません。それでも「困ってないあなたの元気を、そうでないママに注いでもらえませんか？」とか「外出体験をこの機会から始めてみませんか？同じ状況のママとの出会いの場になりますよ」などと何度かトライはするのですが、相手の気持ちに負けてしまうことも…こう見えて気弱なのです。ですからトントン拍子に参加者が決まっていくわけではないのが現状です。

### 母子に関わる人に知っていただきたい

地道に回を重ねながら、たくさんの方々や関係機関に知って頂く事にもエネルギーを注いでいきたいと思っています。鹿屋保健所の保健師さんが、NP・BPの説明を聞いてみたいと以前来館くださったことがありました。今回、保健所が発行する（年1回）母子保健情報誌に、当センターの取り組みとしてNP・BPの紹介が掲載されることになりました。大隅半島3市4町と県の子ども福祉課に配布されるそうです。大変有り難いことですし、これを機に母子に関わる多くの方々にも知って頂き、その必要性について考えて頂ければと心から願っているところです。

原田正文先生著書～BPプログラムの副読本～「完璧志向が子どもをつぶす」をはじめ、「親への絶対的信頼感」「親を運転席に！支援者は助手席に！」という貴重な言葉を胸に「当事者主体」の支援を真剣に考え実践していかなければならない時にきていると教えられる日々です。

